

〜河川調査 その②〜

桃原の井戸・湧ガールで見つけたオオウナギ(方言名:カーンナジ)。普通オオウナギは、海で産卵し、ふ化した子どもが川を上ります。また、湧ガール(河川名)では、アヤヨシノボリ(方言名:イブー)を見つけました。このヨシノボリは河川で産卵しますが、ふ化すると海へ出て生活し、また川に戻る習性があります。湧ガール・湧ガールは小波津川の上流(支流)にあたりますが、「はたして三面コンクリート張りの川を本当によってきたのか?」



東南アジア原産のガラスフィッシュ(池田ダム採集)

だとすれば、自然の力つてすごい(ちなみに河口から上流までは約三キロの距離)。

さて、気になるのは午前中に仕掛けたわなカゴ。小波津川河口のカゴを悪臭と闘いながら引き上げました。が、健闘むなしくカゴの中に生物の姿はありませんでした。

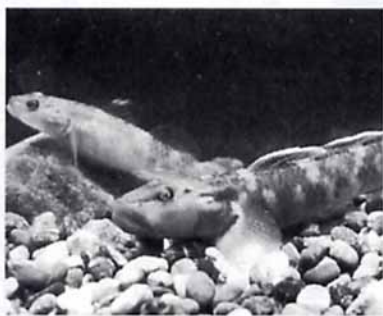
次は、池田ダムへ仕掛けたカゴを見に行きました。なんだか期待薄かなーと思いつつ上げたら、外来の熱帯魚がかかっています。池田ダムといえば、錦ゴイや巨大化したプレコなどの目撃情報も耳にする所です。思わぬところで国際化が進んでいる西原町なのでした。

今回は、春先(しかも雨)の調査のため、あまり生物を確認することはできませんでしたが、その大きな要因はコンクリートの河川整備と生活排水による汚染だということを実感しました。

河川の生物の中には川と海を行き来するものがあり、よどみや蛇行のない流れや、コンクリート

せきなどは、その往来の妨げになっているのです。

以前は西原町の川にもメダカやエビ・カニの姿がありました。町史では、現在の町の自然環境を把握し、その変遷を記録する計画です。生物の活動が盛んな夏に期待して、今後の調査もがんばります。



ヨシノボリ・オス(手前)とメス(桃原にて採集)

番外編

小波津川河口近くに、釣りエサで知られるゴカイの養殖場があります。調査中にのぞいて、冷たくてヌルヌルするゴカイを初めて触りました。潮の満干に合わせて作られたゴカイ養殖場は沖縄本島にはここだけで、出荷先は本土中心とのこと。生物を育てることがどれだけ大変なのかを学びました。